消音都市

――いま、空いてる？
後輩にチャットで尋ねると、すぐに返事がかえってくる。
――空いてますよ！
――ランチとかどう？
――もちろんです！　どこにします？
――新しくできたイタリアンとか？　完全禁音の店みたいだし。
――いいですね、そうしましょう！
そうしておれは隣にいた後輩と席を立ち、ランチに向かう。
お互いに無言で歩いて入った店には、ＢＧＭが一切かかっていなかった。満席に近い状態なのに、話し声もしていない。
おおっ、ちゃんと禁音が徹底されてる。
そう思いながら、身ぶり手ぶりで案内されたカウンターに腰かける。指差しでピザを注文したあと、それが来るまで後輩とチャットで雑談する。
やがて運ばれてきたピザを一口食べて、おれは目を見開いた。
――うまい！
顔をあげると、後輩もこちらを見ながら口をぱくぱく動かしていた。
――めちゃくちゃうまいですね！
もちろん後輩は声を出してなどいない。が、表情とこちらの読唇術とで、そう言っているのは明らかだった。
食後にはコーヒーを静かに飲んで、おれたちは無言で会社に戻った。
パソコンに向かい、ソフトタッチで音を立てずに午後の仕事に取りかかる。

東京から音が消えたのは、いつからだろう。
人口も、街を出歩く人の数も、昔とほとんど変わっていない。
が、気づくと物音はすっかり聞こえなくなっていて、人々も音を立てずに生活するようになっていた。
兆し自体は前からあった。
自動車なんかは、ハイブリッドカーの登場以来、静かに走行できるようになっていた。一時期は、静かすぎて接近してくる車に気づけないと、エンジン音に似た音をわざと鳴らすようにしていたりしたこともあった。しかし、電気自動車の普及が進むにつれて、そもそも音がしないのにわざわざエンジン音を出させるのはナンセンスだという声が高まった。そして骨伝導デバイスが車の接近をぶるっと震えて知らせてくれるようになったことも追い風となり、車からはエンジン音が正式に消え、静かであることが普通になった。
騒音問題の解決も、昔から求められていたことだ。
マンションの上層階の人の足音に、隣人の生活音。店の営業による音に、工事の音。選挙カーの音、飛行機の音、電車での声、犬の鳴き声……。
それらが街から消えた要因のひとつは、吸音材の発達だった。高性能の吸音材が建物や地面に張り巡らされていくにつれ、街はどんどん静かになった。
もうひとつの要因は、条例だった。静かになっていく街の中で声や音を気にする人はますます増え、規制が望まれるようになったのだ。
これにより、公共の場では緊急時と子供を除いて、基本的には声も音も３０デシベル以上は出さないようにと決められた。すでに静けさに慣れてきていた人々はそれを

Copyright 2021　FUJITSU LIMITED

すんなり受け入れて、路上での立ち話もチャットでしたり、ささやき声で話すようになったりした。

イベントごとも消音化が進んだ。元々あった、イヤホンの音で踊るサイレント盆踊り。それに加えてイヤホン経由で演奏を楽しむサイレントライブや、音が出ない花火を使ったサイレント花火大会。

最近では消音化の波は屋内にも及んでいて、カフェや居酒屋では音を出していいスペースとそうでないところを区切る分音化がはじまっている。中にはランチで訪れたイタリアンの店のように完全禁音を売りにするところも出ているほどだ。それでも雑音が気になる人は、高度なノイズキャンセリング機能付きのイヤホンをして日々を過ごす。

過剰な消音は、人として大事な力を退化させる。

そう警鐘を鳴らす人も根強く存在している。もちろん彼らの主張も理解はできるが、個人的にはあまり賛成はしていない。

雑音がないおかげで、いつでもどこでも作業に集中できるようになったこともある。奇しくも飛沫が抑えられ、感染症対策につながったこともある。

しかし、それ以上に好ましかった変化といえば、みんなが物静かで穏やかになったことだ。思慮深い人が増えたような気もしているし、自分自身も感情的に言い返したりしなくなり、心なしか優しくなれたような気もしている。聞くところによると、犯罪率が低下しているというデータもあるらしい。

消音都市も、意外といいものなのだ。

仕事を終えると、おれは同僚にジェスチャーだけでお疲れさまの合図を送って会社を出た。

静かな飲み屋街を抜けて静かな電車に乗りこんで、そっと家に帰宅する。

「ただいま……」

小さな声で口にすると、妻と娘二人がリビングで出迎えてくれた。

「お帰り……」

その声も聞こえるか聞こえないかの大きさだ。家の中ではもちろん自由に声も音も出すことができるけれど、外の静けさに慣れているのでおのずと家でも音を立てない癖がついている。

ただ、そんな中、おれには大きな音を出す場面がひとつだけある。

ギターの演奏を楽しむ時間だ。

たまにはあえて音を出し、ストレスをためないようにする。そういう人が最近は増えているらしく、かくいうおれもちょっと前にギターを買って、完全防音の自分の部屋で弾いてみるようになっていた。

夕食を終えると、おれは部屋にこもってギターを手にした。

思う存分かき鳴らし、声の限りに熱く歌う。

ああ、なんて気持ちがいいんだろう――。

同時におれは、これなら行ける、と自信を持った。

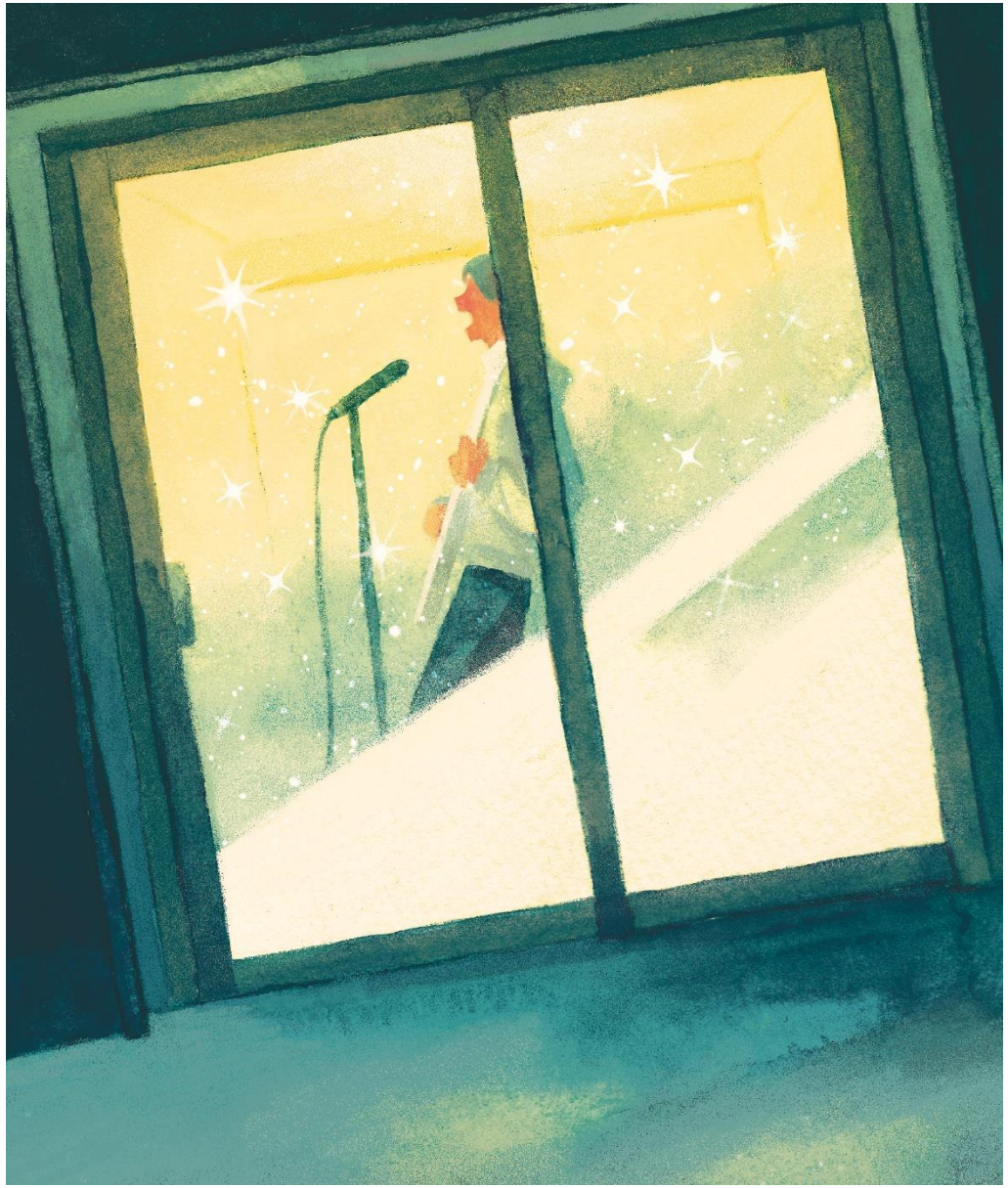
この曲は、妻と娘がよくサイレントライブに行っている有名アーティストのものだった。たまには家族みんなで声をそろえて一緒に盛り上がったりするのもいいかもしれない。そう考えて、こっそり練習していたのだ。

「おーい、みんな！」

Copyright 2021 FUJITSU LIMITED

消音都市

おれはリビングのドアを開け放ち、家族に言った。
「今から曲を演奏しまーす！」
ぽかんとしている家族に向かって、ギターを構える。
ジャンジャンジャジャンと、さっそく音を響かせはじめる。
しかし、しばらくしてのことだった。
おれは予期せぬ事態に見舞われた。
最初は耳を傾けてくれていた娘たちが、何も言わずにリビングから去っていったのだ。
妻はそこに残っていた。が、ノイズキャンセリング機能付きのイヤホンを取りだし、自分の作業に勤しみはじめた。
おいおい、まじかよ……。
現実はずいぶん厳しいものだと、おれはすごすご引き下がる。
家族みんなの、不快そうなあの表情……。
おれの渾身の演奏は、どうやら単なる騒音でしかなかったらしい。



企画・プロデュース/
富士通株式会社 デザインセンター
文 / 田丸雅智
イラスト / いとうあつき

Copyright 2021 FUJITSU LIMITED